

古民家『聴福庵』

ききふくあん

〈特別企画

『聴福庵』

を支える職人道具〉





家の傾きを直す「鉄砲ジャッキ」



今回の特集は、「聴福庵」を支えてくださっている、職人さんたちの仕事道具についてです。

鉋（はさみ）一つとっても、普段折り紙などを切る際に使うものとは異なり、見たことのない大きな刃のものなど、職人さんは自由自在に道具を扱っています。

古民家を直す際には、昔ながらの道具や手作業が必要とされ、今回は『聴福庵』を支えてくださっている職人道具の一部をご紹介します。と思っています。

大工道具

大工道具というと、ノコギリやカンナが浮かびますが、『聴福庵』は、築150年が経ち、家の重みで傾いていました。その傾きを直すべく使用されたのが、鉄砲ジャッキです。

最初は「ダルマジヤッキ」であがるだろうということのようでしたが、あがらず棟梁が知人からお借りしたものでした。

鉄砲ジャッキについて、調べてみると北九州にある、株式会社新田中さんのブログに、鉄砲ジャッキは、私のおじいさんが発明したものです。と紹介がされていました。

知らず知らずのうちに、株式会社新田中の皆様にお世話になっておりました。



用途や素材によって使い分けられる鏝（こて）

全国各地の古民家や重要文化財などに携わっているため、現場に応じて鏝を変えているようです。

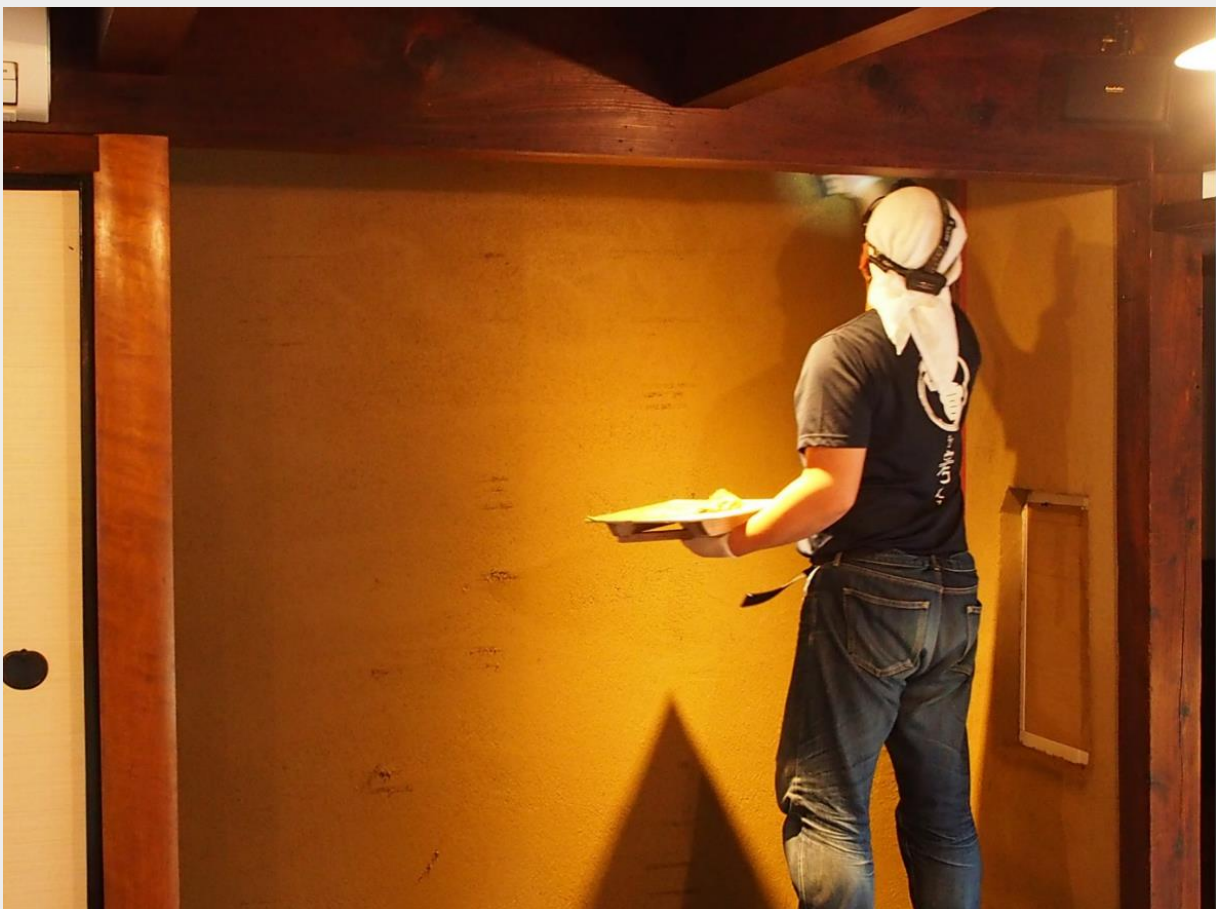
また、左官は現代においても職人が手塗りで行っているため、昔から変わらず鏝一本で仕事を行い、小手先が利かない熟練した技が求められる、「小手先」と言う熟語の語源は左官の仕事から来ているそうです。

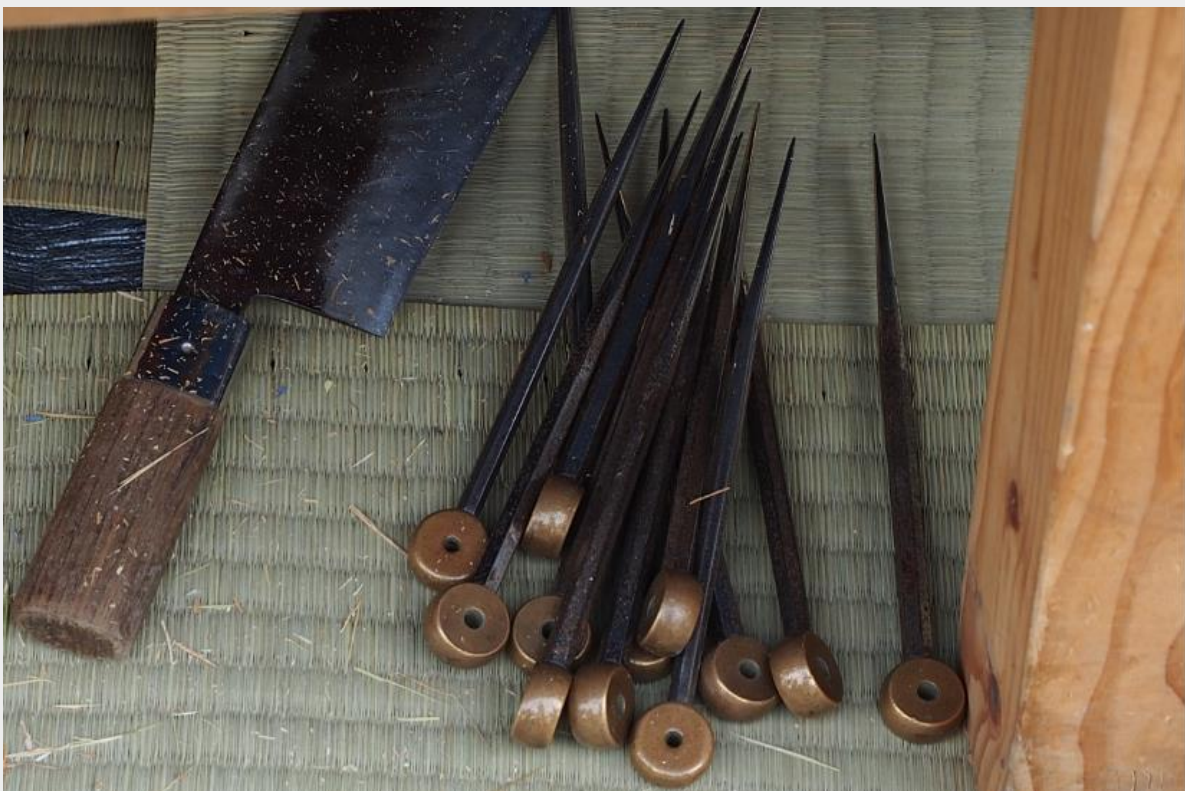
左官道具

左官とは、石灰や土、砂、自然繊維などを組み合わせた自然素材からなる塗り壁（または吹き付け壁）を左官壁と言います。

鏝（こて）は、用途に合わせてさまざまな種類があり、中塗ごて、仕上げごて、木ごて、レンガごて、柳刃ごてなど素材などによっても鏝（こて）を使い分けているそうです。

『聴福庵』でお世話になっている、左官職人の小林さんは、300程の鏝を持っていると仰っていました。





包丁・待ち針（畳表を畳床につり止める時などに使用）



左から包丁・くわい・はさみ・木槌・渡

畳屋道具

畳でお世話になっている佐野畳店さん。ブログでこんなことを語られていました。

祖父が畳屋を始めた1952年。畳屋といえば手縫いが当たり前で、施主さん宅の庭先に畳台を据え、切る、縫う、絞める、といった全ての工程を畳職人が行っていました。

もちろん今ほど、枚数をこなせることもなく、時に施主さんと話し込んだりもしばしばだったようです。

時は流れ、時代とともに効率化が言われるようになり、畳業界も機械化、ロボット化が進み、取り入れられるようになりました。

それに伴い庭先の作業はやめ、畳は自宅工場に持ち帰り、即日仕上げは当たり前になってきました。（中略）

畳について、素材のこと、職人の思い、一針の意味、そんなことを深く知ること、日本に文化として根付いてきた「畳」というものの真髄を見ることが出来ると確信しています。

「佐野畳屋、効率化を考えるの巻」より



七島藺畳が敷き詰められた『聴福庵』

生産ができる農家が9戸のみになっていると、七島藺生産者の淵野さんは仰っていました。

畳表を製作しているところも見せていただきましたが、一日わずか2畳分しかできない手間暇をかけて作られているものです。

『聴福庵』では上記の部屋を七島藺の畳を敷き詰めています。また、円座からの畳のいい香りが部屋に広がっています。

[かなながらブログ…伝承のゆたかさ](#)



七島藺畳（しちとうい）

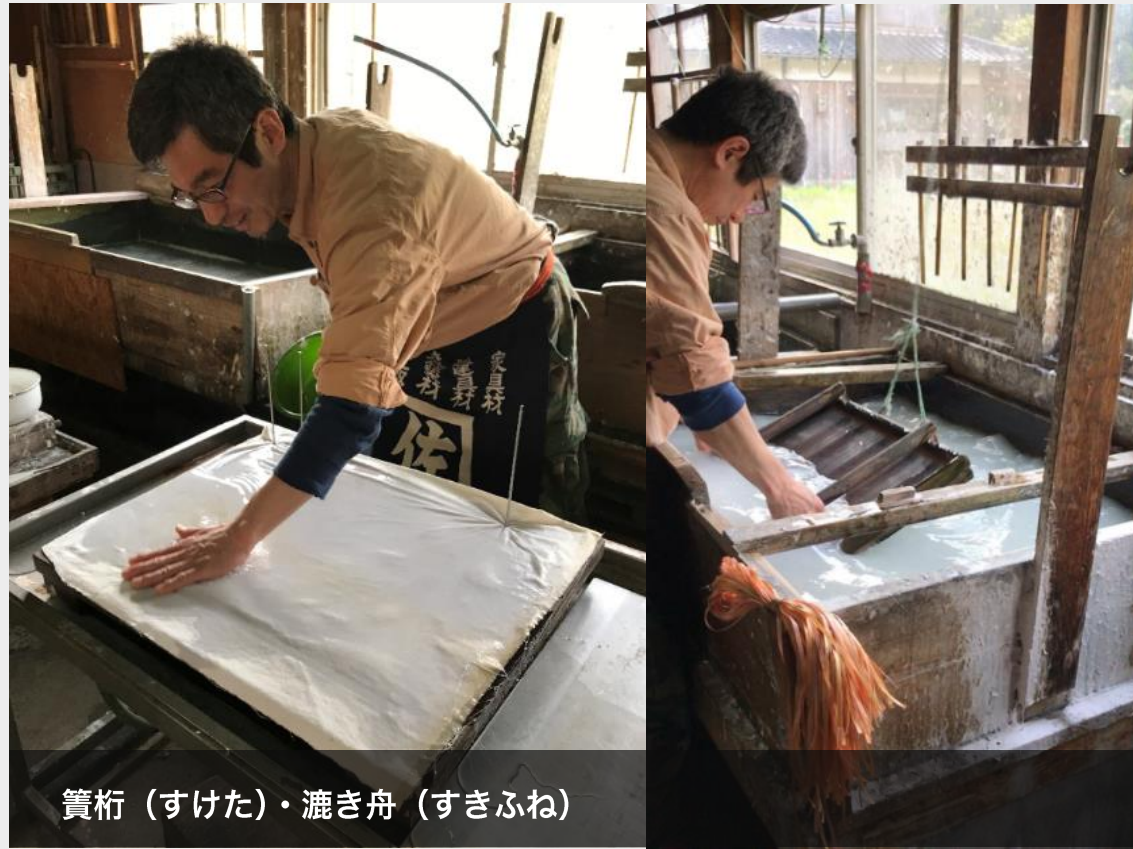
畳生産農家の道具

『七島藺（しちとうい）』は、大分県の国東地方だけで生産されているカヤツリグサ科という植物で、畳の材料として最もよく使われているイグサよりも固く丈夫で、色は青みがかっており、断面が三角形という特徴のようです。

七島藺は350年の歴史があり、琉球畳は本来、この七島藺を使ったものを言っていました。かつては国東で2万戸の農家が生産していた七島藺も今ではその



工房の様子



簀桁 (すけた)・漉き舟 (すきふね)

和紙屋道具

聴福庵の内装に用いる和紙をつくる伝統職人井上賢治さんの工房にお伺いしてきました。

この方は福岡県秋月で130年以上続く老舗和紙製造の4代目になられます。かつては20軒以上あった和紙処も今では井上さんの和紙処のみになったそうです。

伝統的な日本の和紙は、世界一長持ちする紙と言われ奈良の正倉院には1260年前に作られた和紙が当時と変わらず残っているといえます。

和紙は木の繊維を残したまま、それを絡み合わせて作るため丈夫さがあり自然素材だけを使うので化学薬品で無理にくつつける必要もなく1000年以上たっても劣化しない。

(中略)

つまり1000年持つというのは、そのものが1000年生き続けるということであり、楮が1000年のいのちのある存在に転換されるといっても過言ではありません。

井上さんは「紙漉きとはできあがるまで育てる、人生そのもの」だと仰います。

[かなながらブログより…日本人の精神が宿るもの](#)

日本の道具と海外の道具の違い

◆刃物

包丁やのこぎり、カンナなど、引いて切れる日本に対して、上から下に押し切るのが西洋の道具というように、同じ道具でも文化によって使い方が異なるようです。

◆鏝（こて）

また、海外にも塗り壁技法は存在しているようですが、日本の左官との違いは鏝の種類の豊富さにあり、日本の鏝は壁の材料や場所、工程によって使い分けていた

◆和紙と洋紙

「洋紙は100年、和紙は1000年」という言葉があるようで、経年劣化でボロボロになってしまうのに対し、和紙は1000年以上前の古文書が今も残っているそうです。和紙は長い繊維を絡めただけのシンプルな構造のため、劣化しにくいようです。



和紙の原材：楮（こうぞ）、雁皮（がんび）、三桠（みつまた）が代表的な材料です。



九龍（がんりゅう）文様：龍神の持つパワーを丸で封じ込めた文様



版木（はんぎ）

唐紙屋道具

創業寛永元年（1624年）京都に創業し、江戸時代より続いてきた日本唯一現存する 唐紙屋で唐紙師のトト・アキヒコさんとお会いするご縁をいただきました。

今回、見せていただいた数百年も前の版木には先人たちが自然から写し取ったいのちの姿が文様にされ深く刻み籠まれています。

その版木を触った感じからは、その歴史の中で大切に守り抜かれてきたぬくもりやいのりが感じられ、単に現代のように機械でコピーやプリントではなくまさにそのプロセスに「いのちの移し替え」を行っているような感覚を覚えました。

（中略）

今も変わらず唐紙師が版木の表面に雲母・胡粉と呼ばれる絵具を付け和紙や鳥ノ子紙に柄を合わせながら一枚一枚、手の平で文様を写し出す様子には先人たちが如何に美しい暮らしを味わい尊んできたのかが伝わります。

最後に、唐紙師のトトアキヒコさんの言葉です。「唐紙は、祈りの風景です。人々の祈りや願いの物語がこめられたカミさまの宿る美しい風景を、ぼくは唐紙と呼びます。」

かなながらブログより…美の原点〜道統を継ぐこと〜



聴福庵の壁紙を手漉きの和紙で貼っていく作業が進んでいます。一枚一枚、同じ形、同じ模様、同じ厚みのものは一つもなくそれぞれに個性があり印象が異なる手漉き和紙を丁寧に手作業で職人の方が貼り合わせていきます。

今では機械でプリントされたものや、化学合成された紙風のものもを接着剤で一気に貼れ、時間も短縮されて簡単便利に交換しやすいものになっています。

最近では防火法の関係で燃えるものは壁紙に使えないということで、今回のような手漉きの和紙を貼るような仕事はほとんど皆無になったと仰っていました。

[かながらブログ](#)・文化の甦生より



唐紙（枝桜紋）を襖に丁寧に貼って頂きました。

内装屋道具

玄関入ってすぐの襖には、枝桜と丸龍の唐紙が貼られています。内装を行って下さった松尾さんも、唐紙を貼るのは初めてと仰っていました。

手漉きの和紙や唐紙、職人さんが丁寧に、そして魂を込めて作って下さったものを、また別の職人さんが引継ぎ、『聴福庵』にて、作業を行ってくださいました。

糊をつけ、貼っていく姿は美しく、黙々と作業が行われました。



6mまで掘り進め、残り30cm仕上げのところを悪戦苦闘していると、井戸職人の赤坂さんは前立腺がんのため、仕事を医者に止められていましたが、「俺が入らな埒があかん」ということで無理を承知で作業に当たって下さいました。

現代においては、掘削機を使って掘るため、スコップ一本というのは赤坂さんにとっても珍しく映ったのかもしれない。



井戸屋道具

現代において手掘りで井戸を掘っている職人はおらず、いても全国に3名いるか、どうかだと言います。

かつて手掘りを経験したことがあるという、赤坂ボーリングの赤坂さんに来て頂き、掘り方のレクチャーとお手製の梯子、垂直に掘れる道具を貸して頂きました。

水が染み出てから+2m程掘っておいた方がいいということを知り、ひたすらスコップで掘っては、土を運び出しました。



工房の様子

また、明治頃の炭で 沸かす桶風呂を見ると、「子どもの頃、見たことがある気がする」と直せるか分からないけれど、いいながら引き受けてくださいました。

基本的な「桶」の製造工程は、寸法に合わせてパーツを切り出し、定規で丸みを測り、カンナで削りながら円形に整え、パーツを組み立て、箍をはめて完成ですが、全国から修理依頼のある木桶の修理には熟練の技がいるようです。



桶屋道具

八女市で90年以上続く九州で唯一の桶職人、松延工芸の松延新治さんに『聴福庵』の離れにある風呂桶を2つ直して頂きました。

1つは60年前の大きな奈良漬けの樽として使用されていたものを風呂桶用に加工して頂き、もう1つは明治頃の炭で沸かす桶風呂です。

これまでいくつもの桶を直してきた松延さんも、漬物樽を風呂桶用に加工するのははじめだったそうです。



瓦用金槌（玄翁・げんのう）



瓦拵機

瓦屋道具

伝統工法ができる瓦葺き職人さんに聴福庵に来ていただきみんなと一緒に瓦葺きを土葺きによって行いました。

最近では瓦葺きを拝見することも少なくなってきましたが、一緒に屋根にのぼり瓦を一枚一枚葺いていくことではじめて屋根瓦の魅力を再発見できます。素材もそうですが、職人さんの手仕事には感動することばかりです。

この土葺きというものは、近江大津の瓦工である西村半兵衛によって発明された平瓦と丸瓦が一体化した「棧瓦」が発明され、その瓦の風と地震対策として土葺き工法が行われたと

います。この土葺きは湿式工法とも言われ、野地板の上に杉の皮などの下葺き材を敷き、その上に粘土を乗せ、その粘土の接着力で瓦を固定していく工法です。（中略）

土葺きは、一つひとつの瓦の個性や形状をみて瓦職人さんの塩梅で瓦割をして配置され施工していきます。こだわっている職人さんになると、何回も何回も数多くの組み合わせを試していくので葺くのに相当な時間を要するともいえます。

[かなながらブログ](#)…湿式工法の瓦葺きーより

【聴福庵を通して思うこと】

職人さんが作業している時、「この道具って何に使うのだろう？」と思いながら写真を撮っていました。職人さんの道具ばかりを並べて見ると、これまで気づいていなかったことを教えてくれているように感じました。

これまで『聴福庵』が修繕されていく様子を追っていました。そこには、勿論職人さんが欠かせない存在ではありましたが、職人さんが使う道具を見ていくと、その職人さんを支えているのは、その道具たちなのではないかとさえ想いが巡ってきます。

はさみ一つとっても、様々な大きさや形があり、子どもたちが折り紙を切ったりする物とは形状が異なり、その違いに気づくだけでも教育的要素があると感じます。そして、職人さんの道具を見ていく中で、日本は引く文化であることや海外との違いを知るにつれ、素材を最大限生かそうとする際には、この「引き出す」ということが大事で、子どもたちの良いところを引き出すように、職人さんたちは働いていました。

職人さんの道具を見ていく中で『聴福庵』はたくさんの方に支えて頂いていることを忘れてはならないと、改めて感じました。

2019年4月8日 株式会社カグヤ 奥山卓矢

 **caguya**

〒161-0023

東京都新宿区西新宿 3-2-11 新宿三井ビルディング 2号館 10階

Tel:03-5909-7155

毎週月曜日に配信しています。

ミマモルジュメールマガジン発行：株式会社カグヤ 奥山卓矢

ミマモルジュメールマガジン



メールマガジンのご登録は、
QRコードからお願いします。



左官職人さんと一緒につくった手作り竈（かまど）



手漉き和紙が貼られた壁面